



第九歡喜の歌の はじまり

心
あ
つ
た
か
ニ
ュ
ー
ス

NMCAA
NO3

ベートーベンの第九が日本に根づいたのは、戦時中の日本の收容所からということをご存じでしょうか？戦時中であつても、相手を想い友情を築くことができ、それが文化の交流となつていくというお話です。第一次世界大戦中、徳島県鳴門市にあつた板東俘虜收容所(ぼんどうふりよしゅうようじよ)は、閉鎖されるまでの2年10ヶ月の間にドイツ兵1000名を收容しました。收容所の所長の松江豊寿は「武士の情け、これを根幹として俘虜を取り扱いたい」という理念のもと部下にも捕虜を犯罪者のように扱うことを固く禁じた收容所でした。

ここでは、捕虜に生産労働や文化活動が許可されていたので、ドイツの技術が日本に伝えられます。收容所内には、パン工場があり、野菜の栽培指導で、トマトや赤ビート、キャベツが実り、牛乳の生産量は5倍増しになるといふ成果もありました。日本語教室や芸術活動、各種

スポーツを楽しむ捕虜。そして町の人々はドイツ兵捕虜を「ドイツさん」と、親しみを込めて呼ぶ国を超えた友情が育まれます。1918年6月1日には、收容所で結成された楽団によつて、ベートーヴェンの交響曲第九番が合唱付きで全曲演奏されます。女性がいないため、ソプラノパートを男性用に編曲し、收容所にはない楽器はオルガンでカバーするなど、苦勞と工夫の末の演奏でした。だから捕虜が本国へ帰る時は、町の人たちは総出で見送り。目に涙を浮かべる人もいたそうです。

現在も続く交流

昭和22(1947)年、ここで暮らしていた高橋春枝さんは偶然、收容所時代に亡くなった11人のドイツ人慰霊碑を見つけ、13年の間、慰霊碑の清掃を続けました。慰霊碑が今も守り続けられていることを知つたドイツ兵から手紙が届いたのをきっかけに、再び交流が始まります。ドイツから当時の思い出を綴つ(つづ)つた手紙や写真が次々と送られると、それに応えるように町では当時の面影を残す元收容所の建物や周辺の景観を映した8ミリ映像を

制作。1972年昭和47年)には鳴門市に鳴門市ドイツ館創設されました。ドイツからのある手紙にはこう書かれています。「バンドウにこそ国境を越えた人間同士の真の友愛の灯がともっていたのでした。……私は確信を持つて言えます。」

参考
ドイツニュースダイジェスト
(産経WESTより)

編集後記
明けましておめでとうございます。年末の第九には日本にきた歴史があつて、関わつてきた人達の相手を感じる心が交流から始まつたことが、なんだかとても素敵で、新年の第一号にさせていただきますました。歴史を創るのは心の交流で、ふれあいなのだ、あつたかい気持ちになりました。